中世ヨーロッパの伝説
――（3）『ゲスタ・ロマノールム』――

高木昌史

序

『中世百科事典』Enzyklopädie des Mittelaltersによると、[1]ドイツ中世文学は一二〇〇頃にその絶頂期を迎えたが、十三世紀中葉を境に、新たな潮流が顕著になってくる。「教訓文学」Lehrdichtungが、稀に見るほど、ヨーロッパ規模で、隆盛となるのである。[2]ハルトマン・フォン・アウエの『哀れなハインリヒ』（一一九五年）や英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』（一二〇〇年頃）等、絶頂期の韻文ではなく、この頃になると、主に散文による教育的な物語文学が成立する。中でも、著者不詳の説話集『ゲスタ・ロマノールム』Gesta Romanorum（ローマ人行状記）（一三〇〇年頃）（以下GRとも略記）はその代表例である。

伝統的な文学ジャンルに「模範集」（ラテン語exemplum「模範」、「範例」）がある。[3]「教義上の、または道徳的な教えを具体的に示すための、積極的あるいは否定的な範例となる短い物語」[4]がそれで、古典古代に、法廷で論証のため修辞学の一手法として用いられ、帝政時代には文学のあらゆるジャンルにそれが応用されたと言われる。神話、寓話、歴史、経験談等から題材が採られ、ウァレリウス・マクシムス（一世紀前半）は最も引用された作家の一人であった。中世になると、「模範集」は、グレゴリウス一世（五四〇頃―六〇四年）の説教等に引き継がれ、以後、十二世紀

後半からキリスト教信仰の力を例証する説教物語としてさらに広く普及した。イタリアのドミニコ会修道士でジェノヴァの大司教を務めたヤコブス・デ・ウォラギネ Jacobus de Voragine（一二三〇頃―一二九八年）の『黄金伝説』Legenda Aurea（一二七五年頃）は最も有名であるが、他に、フランスのドミニコ会士ヴァンサン・ド・ボヴェ Vincent de Beavais（一一九〇頃―一二六四年）の『歴史の鑑』Speculum historiale（一二五〇年）等もよく知られている。[5]『ゲスタ・ロマノールム』は、この系譜に属する記念碑的な説教集に他ならない。[6]

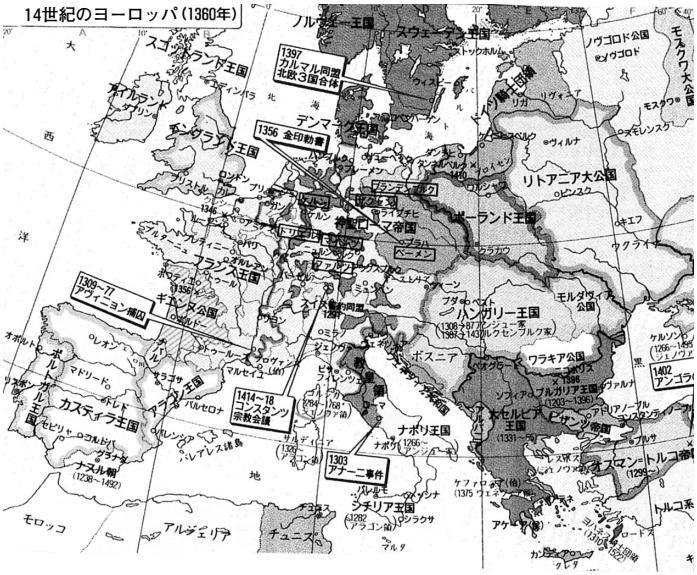
「模範集」は、宗教改革によって、新教国では一時下火になったが、カトリック教会ではその後も伝統が維持され、アルザス地方タン出身のフランチェスコ会士ヨハネス・パウリ Johannes Pauli（一四五〇頃―一五三〇年頃）は、六九三篇もの説教集を収めた主著『冗談とまじめ』Schimpf (=Scherz) vn (und) Ernst を、一五二二年に発表した。[7]

ところで、ドイツ・ロマン主義の時代、グリム兄弟 Brüder Grimm が『ゲスタ・ロマノールム』の意義を再発見し、彼らの『子供と家庭の童話集』Kinder-und Hausmärchen（以下、ＫＨＭとも略記）[8]編集に際して、右の『冗談とまじめ』同様、研究・活用した。特にＫＨＭとの関連から、本稿では、この説話集を読み直し、ヨーロッパの口承文芸における中世的要素を垣間見ることにしたい。

第一章　『ゲスタ・ロマノールム』 Gesta Romanorum

『黄金伝説』と並んで、中世ヨーロッパで最も普及した説話集『ゲスタ・ロマノールム』は謎に包まれている。前者（『黄金伝説』）が著者も成立時期も明確であるのに対して、[9]後者の説話集に関しては、何時、何処で、誰が著した作品なのか、すべてが不明なのである。[10]今日、確認されている範囲の事柄は次の通りである。

『ゲスタ・ロマノールム』最古の写本は、現在、オーストリアのインスブルック大学図書館に保管されている（二二〇篇所収、「ラテン語写本」三一〇番）。一三四二年のもので、これを底本に、十五世紀後半、多くの印刷物が刊行された（グーテンベルクの活版印刷術発明は一四四〇年頃）。ところで、右の写本はすでに改訂された作品らしく、最初の手稿は一三〇〇年頃の成立と推定されている（図版



図版1　説話集『ゲスタ・ロマノールム』成立時のヨーロッパ地図

1)。著者は不詳で、成立場所も不明であるが、イギリス説あるいは南ドイツ説が有力である。GR各物語に付せられた「道徳的解釈」moralisationes から、聖職者が説教用にこの作品を著したことは間違いないようだ。[11]

『ゲスタ・ロマノールム』は元々ラテン語で書かれているが、その後、十四世紀末、民衆語（俗語）に翻訳され、ドイツでは主に南部を中心に広まった。因みに、英訳による最古のテクストは、一五一〇年頃、またフランス語のものは、一五二一年に、パリで初めて印刷されている。[12]

『ゲスタ・ロマノールム』は、ドイツ語圏において、一八七二年に、H・エスターライ編の最も浩瀚なラテン語テクストが刊行された。内訳は、一～一五一番が最古の印刷（ウトレヒト、一四七二年）、一五二～一八一番が増補版（ケルン、一四七三年）、一八二～一九六番が補遺写本（アウクスブルク、一四八九年）、最後の一九七～二八三番がその他の写本である。現在もこのテクストが基準となっている。[13]

次に、『ゲスタ・ロマノールム』の内容は、『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens（以下EMと略記）[14]に拠

ると、およそ次の八つのジャンルに分類される。

（1）博物誌、（2）異教的古代、（3）「旧約聖書」、（4）キリス教聖者伝、（5）寓話、（6）笑話、（7）公共生活、（8）聖職者の寓意

実に多彩な内容である。例えば、（1）では、鉱物、動物、植物、装身具、楽器、（2）ではギリシア神話の英雄ペルセウスやオデュッセウス、アレキサンダー大王とカエサル、（4）では聖アレクシスと聖グレゴリウス、（7）ではローマの凱旋行列、中世騎士の馬上試合等が、古代の著作から豊富に引用されている。以上のように、ジャンルは多様であるが、『ゲスタ・ロマノールム』の核心となるテーマは、「普遍的・人間的行為」、換言すれば、人間と人間との関係である。R・ニッケルも指摘するように[15]、中でも、「男女関係、愛情と嫉妬、誠実と不実、妬み、悪意、傲慢と卑劣、また謙虚、同情、寛容、正義、犠牲心、勇敢」が、まさしく「時間を超えたテーマ」[16]として、説話集『ゲスタ・ロマノールム』の中心をなしている。

グリム兄弟の『ゲスタ・ロマノールム』研究

『子供と家庭の童話集』を編纂するに当たって、グリム兄弟は、世界中の昔話を収集・研究していたが、KHM「研究篇」[17]の中で、彼らは、中世の文献としては唯一、『ゲスタ・ロマノールム』の名を挙げる。『グリム兄弟の蔵書』[18]にはGRのテクストとして五冊が掲載されているが、KHM「原註」Originalanmerkungen[19]の中で、グリムはそれらを参考にしばしばGRに言及する。

＊蔵書目録の五冊中、紛失等のものを除くと、A・ケラー編の二点（一八四一年／一八四二年）の他、次のテクストが挙げられている。

Gesta Romanorum, das älteste Mährchen-und Legendenbuch des christlichen Mittelalters, Hrsg. von Johann Georg Theodor Gräße. 1.2. Dresden, Leipzig : Arnold 1842.

『ゲスタ・ロマノールム』、キリスト教的中世の最古の昔話と伝説、ヨハン・ゲオルク・テオドーア・グレッセ編、第一・二巻、ドレスデン、ライプツィヒ、アルノルト社、

一八四二年。[20]

本稿では、このグレッセ編ドイツ語訳を、伊藤正義訳『ゲスタ・ロマノールム』（篠崎書林）およびレクラム版ラテン語／ドイツ語対訳と併行して参照する。[21]

さて、グリムは、ＫＨＭ「研究篇」〈文献〉Literatur の中で、『ゲスタ・ロマノールム』について次のように解説する。

「大抵はローマ皇帝の行状に関係し、様々な出典から採られた、かなり昔のこのラテン語物語集は、この題名［『ゲスタ・ロマノールム』＝ローマ人行状記］を冠している。それは恐らく、十四世紀の半ばに書かれているが、誰の作品なのかは確実には言えない。イギリス人あるいはフランス人だったかも知れないが、犬のドイツ名が出てくるので、十中八九はドイツ人のものであろう。著者に関する論文の一つは、グレッセの独訳に見出されるが（ドレスデン／ライプツィヒ、一八四二年、二巻）、そこにはすべての版と翻訳が精密に記載されている。我々は、昔話的であると同時に、元来、口承のものに由来する物語、但し、本の主要な目的である聖職者の利用のために少し改変された物語だけを考慮する」。[22]

続いてグリムは、『ゲスタ・ロマノールム』から十四篇を抜粋・紹介する。中世の説話集と近代の昔話集との関連を考える場合、その選択は貴重な指標を与えてくれるが、十四篇は次の通りである。

＊（　）内はグリムのコメント（部分）、［　］内は訳者の註、題名は邦訳［伊藤正義訳］に拠る。

1　第一七話「グイドーの物語」（一四八九年ラテン語版第一七章）

2　第二〇話「受け取れ、返せ、逃げよ」（［ＫＨＭ］二九「黄金の毛が三本ある悪魔」の冒頭と一致する昔話、但し、皇帝ハインリヒの伝説としても出てくる〈『ドイツ伝説集』第二巻四八〇［四八六］番「ハインリヒ三世帝の伝説」〉）

3　第五八話「三つの真実」

4　第六〇話「手まり」（アタランテーの伝説［ギリシ

ア神話」が直ちに想起される）

5　第七六話「山羊の目」（ドイツの昔話［ＫＨＭ］一一八番［「三人の軍医」］の注釈を参照）

6　第九一話「一番の怠け者」（ドイツの昔話［ＫＨＭ］一五一番［「三人のものぐさ」］の注釈を参照）

7　第九二話「二匹の蛇」

8　第一〇六話「夢のパン」（笑話 Schwank）

9　第一一九話「恩知らずのグイドー」（『ペンタメローネ』三―五）

10　第一二〇話「ヨナタン」（「フォルトゥナートゥスの昔話」、ドイツの昔話［ＫＨＭ］一二二番［「キャベツろば」］と比較）

11　第一四一話「蛇とミルク」（［ＫＨＭ］第一〇五「蛇の話」の注釈を参照）

12　第一二四話「半分馬に乗って」（ドイツの昔話［ＫＨＭ］九四番「賢い百姓娘」の注釈と比較）

13　第一九〇話「黒」（『ディートリヒ・フォン・ベルンの死に関する伝説と比較）

14　第七〇話「三つの課題」[23]

先の分類中、博物誌（蛇）、異教的古代（アタランテー）、笑話（夢の話）等のジャンルの物語が見られる。それらを個々に検証するのも興味深いが、本稿では、この中、説話文学の特色をよく示すと同時に、文学史的にも影響力の大きい三篇、「受け取れ、返せ、逃げよ」（第二〇話）、「ヨナタン」（第一二〇話）および「半分馬に乗って」（第一二四話）を取り上げる。グリム童話はこれら三篇と深い関係を有するからである。

第二章　「受け取れ、返せ、逃げよ」

「苦難艱難について」、独語訳 Von Trübsal und Elend を原題とする『ゲスタ・ロマノールム』第二〇話「受け取れ、返せ、逃げよ」（邦訳題）は次のような物語である（以下要約）。

皇帝コンラドゥス（＝神聖ローマ帝国皇帝コンラート二世）の時代（九九〇頃―一〇三九年）、レオポルドゥスという名の貴族がいた。［命に背いた］彼は皇帝の怒りを恐れて、妻と森へ逃げ、小屋に隠れていた。

この森で狩猟をした帝が、日が暮れたため、例の小屋で一泊した。宿の女主人は妊娠中であったが立派にもてなした。その晩、彼女は男児を出産した。眠っていた皇帝は、「受け取れ」という声を聞いた。皇帝は眼を覚ましたが、意味が分からないまま寝入った。すると「返せ」という声が聞こえた。皇帝はまた目を覚ますが、意味を理解できずに眠り込んだ。三度目に声が聞こえた。「逃げよ」、「生まれた子は、汝の婿になるだろう」。皇帝は恐怖に襲われた。翌朝、皇帝は臣下を呼び、赤子を母親から奪って、その心臓を持ってくるように命じた。臣下は哀れに思い、その子を木の上に置き、野兎の心臓を皇帝に差し出した。その日、偶然、ある公爵が森を通り、赤子の泣き声を聞き、その子を密かに家に連れ帰った。息子のいない彼は、男児をヘンリクスと名付け、夫人に彼らの子として育てさせた。頭脳明晰な美男子に成長したヘンリクスが皇帝の目にとまり、彼は宮廷に住むことになった。皇帝はこの青年が、昔、彼が臣下に殺害を命じた例の子供ではないかと疑った。彼は皇后に手紙を書き、手紙を受け取り次第、青年を殺すように指示した。教会に行った皇帝がベンチで寝込んでいる間に、司祭が手紙を見つけ、「姫をこの青年に花嫁として与えよ」と書き換えた。婚礼が挙行された旨を知った皇帝は、神の摂理には逆らえないことを悟り、青年を自分の後継者に決めた。[24]

森の中の情景、子供の殺害指令、身代わり動物の心臓はグリム童話「白雪姫」Sneewittchen（ＫＨＭ五三）の一場面を想起させ[25]、また手紙の差し替えは、旧約聖書の「ウリヤの手紙」[26]で知られるモティーフである。他、夢のお告げ等、『ゲスタ・ロマノールム』第二〇話は、伝承文学の重要な要素を幾つか含んでいる。グリム兄弟はＫＨＭ「研究篇」の中で、この物語の類話として、彼らが編集した『ドイツ伝説集』Deutsche Sagen 四八〇番「ハンリヒ三世帝の伝説」Sage von Kaiser Heinrich III. とＫＨＭ二九番「黄金の毛が三本ある悪魔」Der Teufel mit den drei goldenen Haaren を挙げている。[27]

前者伝説の内容は『ゲスタ・ロマノールム』と殆ど同じだが、冒頭でレオポルト・フォン・カルフ伯がコンラート［二世］帝の不興を買った具体的な理由が語られ（「平和を

破る者は斬首されるべし」の命に背いたこと）、舞台である森もシュヴァルツヴァルト（ドイツ西南）と明記されることによって、物語全体は歴史的現実に近い印象を与える。また、後者昔話（ＫＨＭ二九）は、ＧＲ第二〇話を背景にすると、内容の普遍的な広がりが一層浮き彫りにされるようである。粗筋は次の通りである。

昔、ある貧しい女が男の子を産んだ。その子は「福頭巾」［羊膜］を被って生まれ、十四歳で王様の姫を花嫁にする、と予言された。間もなく、王様が村に来て、福頭巾の子の噂を耳にし機嫌を損ね、予言の先回りを目論んで、両親に金貨を渡し、子を預かって箱に入れ、河に投げ込んだ。箱は水車場に流れ着き、粉ひき夫婦がその捨て子を育てた。男の子は美徳を具えて成人した。嵐の日、王様が水車場に避難し、両親の話から、その子が、自分が捨てた子だと分かった。そこで王様は妃宛てに、持参した者を殺すように指示した手紙を書き、男の子を送り出した。森の中で迷子になった男の子は、強盗の棲家に宿を借りた。お婆さんに世話され、寝ている間に、強盗たちが手紙を読んだ。彼らは男の子に同情し、持参した者を姫と結婚させよ、と内容を書き換え、翌朝、男の子を見送った。手紙を見た妃は早速、姫と男の子の結婚式を挙げさせた。城に帰った王様は、事情を知って立腹し、花婿に、地獄から悪魔の黄金の毛を三本取って来るように命じた。福頭巾の少年は出発した。ある都で彼は市場の井戸が涸れた理由を聞かれ、別の都では黄金の林檎が生［な］らない理由を問われ、また大きな川岸の渡し守からは、代わりの船頭がいない理由を聞かれ、それぞれに自分が帰るまで待つように言った。川を渡ると、地獄の入口があった。悪魔は留守で祖母がいた。男の子が悪魔の毛が三本欲しい旨を伝えると、お婆さんは少年を蟻に変え、スカートの襞に隠した。悪魔が帰って来て、祖母の膝で虱を取ってもらう間に、祖母は、夢に託して、井戸が涸れた理由、黄金の林檎が生らない理由、渡し守の代わりが来ない理由を、悪魔から聞き出した。井戸の石の下の蛙を殺す、林檎の根をかじる鼠を殺す、来た者に棹を渡す、以上が回答だった。お婆さんは、その間、悪魔から黄金の毛を三本引き抜き、少年を蟻から人間に変身させた。福頭巾の子はお

婆さんにお礼を言って地獄を後にした。渡し守、黄金の林檎の都の番人、井戸の涸れた都の番人にそれぞれ彼は回答を教え、お礼に金貨をもらい帰国した。欲張りの王様は金貨を見て喜び、自分も欲しくなって、例の川に出掛けた。渡し守は、王様と共に向こう岸に着くと、棹を王様の手に預け、自分だけ舟に跳び乗った。以来、王様は地獄で渡し守をしている。[28]

右の昔話はドイツ中央部に位置するヘッセン・ツヴェーレン村出身のドロテーア・フィーマンから採集されたもので、KHMには第二版（一八一九年）以降収録された。[29] グリムの「原註」には、他にマイン河地方の類話などが紹介され、「皇帝ハインリヒ三世に関する古い伝説はこの昔話の導入部と類似している（『ドイツ伝説集』第二巻、四八〇番、『ゲスタ・ロマノールム』参照）」とメモされている。[30]

「福頭巾」Glückshaut［＝幸運の膜］を被って生まれた子が、将来、自分の娘（姫）と結婚すると聞いて、王様はその子を川に遺棄する。このモティーフは、ナイル川に捨てられた幼児モーセ（旧約聖書）[31]、海に流された赤子ペルセウス（ギリシア神話）[32] で知られる英雄譚の系譜に属している。英雄は、一旦、水の中で死に（仮死状態）、新たな生命として甦る。一種の儀式（洗礼）を連想させるが、英雄の将来は、結果的に、これによって保証されるのである。

KHM二九に見られる第二のモティーフは「ウリヤの手紙」である。興味深いのは、人殺しも辞さない強盗たちが、男の子への同情心から、彼の生命を救うべく、手紙の内容を書き換えていることだ。これは、強欲のあまり最後には地獄の渡し守にさせられる王様と好対照である。昔話というジャンルが、社会の通念（王の権威、等）に捉われない、しばしば（ア）イロニーを含む自由で客観的な視点を持つ文学であることをよく示している。対象から距離を取るアイロニカルな性格が昔話には内在する。これは、昔話に特有のある種の軽やかさの一因ともなっている。[33]

最後に、運命に「先回り」しようとしても無駄で（『ドイツ伝説集』DS四八〇）[34]、「神の意志に逆らうことは出来ない」（『ゲスタ・ロマノールム』GR二〇）[35] というテーマは、実は、ヨーロッパのみならず、世界的に見られる観念である。古代中国の物語集、干宝編『搜神記』の四四八番「運命の神」はその一例である。（以下要約）

陳仲挙は出世する以前、黄申の家に泊まった。その時、申の妻が子供を産んだ。夜、家の門を叩く者がいた。家人が気づかずにいると、家の裏で、客間に人がいるので入れないと人声がした。門の人物は、では裏から入ろう、と言ったが、間もなく引き返した。待っていた者が、男女の別と名前と寿命を訊くと、一方は、男で名は奴［ど］、寿命は十五歳と答えた。前者が死ぬ理由を訊くと、刃物で死ぬと答えた。仲挙は家族に、この子は刃物で死ぬと話した。両親は驚いて、気をつけた。子供が十五歳になったとき、誰かが梁に鑿［のみ］を置き、柄だけが見えていた。木切れと思って子供が鉤で引くと、鑿が落ち、頭に突き刺さって死んだ。その後、仲挙は豫章（江西省）の太守に就任し、申の家に贈り物を届けさせ、奴のことを訊ねさせた。家族が事情を話すと、仲挙は、これが運命というものだ、と嘆息した[36]。

陳仲挙は後漢（一～三世紀初頭）の人物で、物語では運命の不可避性が中心テーマとなっている。先のＧＲ第二〇話あるいはＤＳ四八〇番において、コンラドゥス（＝コンラート）帝は、いかに策を弄しても、捨て子と姫との結婚を阻止出来なかったが、中国の右の話でも、申の家族は子供の宿命を、結局、回避出来なかった。伝説の中の結婚は祝福されるべきものだが、中国の物語の刃物による死はまさに悲劇的である。ＫＨＭ二九の主人公は、以上に比べて、最初から幸運を約束された存在（申し子）である。英雄譚の例に倣って、水中への遺棄という厳しい試練が待ち構えてはいたものの、それを乗り越えて、地獄行の冒険のあと、遂に、彼は幸運（＝三本の黄金の毛／姫との結婚［王位継承］）を手に入れる。昔話らしいハッピーエンドである。

古代中国の物語、中世ヨーロッパの説話、そしてグリム童話、いずれにおいても、運命の避け難さは人類共通の観念あるいは謎となっている。Ｈ・Ｊ・ウターは、ＫＨＭ二九をＡＴ（アールネ／トンプソン話型）九三〇および四九一に分類する[37]。ＡＴ九三〇は「運命の物語」Tales of Fate の一つで、１「予言」／２「売買と遺棄」／３「ウリヤの手紙」／４「後日談」を構成要素とし[38]、ＡＴ四九一「悪魔の三本の毛」Three Hairs from the Devil's Beard は、１「序」／２「悪魔の毛を求める冒険行」／３「問題」／４「冒険行の成功」／５「報酬」／６「渡し守としての王様」[39]

を骨格とする。グリム童話「黄金の毛が三本ある悪魔」は、まさしく「運命」Fate の不思議を伝える（ＡＴ九三〇）、地獄への「冒険行」Quest（ＡＴ四九一）の物語に他ならないが、グリム兄弟は『ゲスタ・ロマノールム』にその先例を見出したのである。

第三章　「ヨナタン」

「女性の巧妙な欺瞞と騙された者の眩惑について」Von dem feinen Trug der Weiber und der Verblendung der Betrogenen を題とする『ゲスタ・ロマノールム』第百二十話、邦訳「ヨナタン」は次のような物語である。（以下要約）

ダリウス王には息子が三人いた。死期が迫った王は、長男に父祖伝来の遺産、二男には王自身が得た富、三男には三つの呪宝、すなわち、金の指輪と首飾りと高価な織物を与えた。指輪には誰からも贔屓にされ何でも入手できる力、首飾りには願望が成就する力、織物には何処へでも行ける力があった。王が死に長男と二男は遺産をもらい、三男は大学へ行くことになった。母親は息子に、女には気をつけるように忠告して指環を渡した。

末息子ヨナタンは学問を身につけたが、ある時、町で美人に出会い、好きになり下宿に連れ帰った。女はヨナタンが上機嫌の時、富裕な生活を送れる理由を尋ねた。彼が指環の秘密を打ち明けると、女は指環を横領し、盗まれたと偽った。ヨナタンは王妃の許に帰って首飾りを受け取った。大学に戻ったヨナタンは偶然、例の女に再会した。二人はふたたび同棲した。ヨナタンが豪勢な暮らしが出来る理由を女は言葉巧みに訊き出し、首飾りを隠し、盗まれたと言い訳した。ヨナタンは再度、王妃の許に行き、厳しく忠告されて織物をもらった。ヨナタンはまた例の女に迎えられた。二人は織物に乗って世界の果ての森に行った。ヨナタンは女に指環と首飾りを返さなければ置き去りにすると脅したが、女は巧妙に織物の秘密を訊き、ヨナタンが眠っている間に、自分だけ織物に乗って都に戻った。

目覚めたヨナタンは川を渡った。水が熱く足の肉が剥がれた。彼は水を容器に入れて進み、木の実を食べ

図版 2　民衆本『フォルトゥナートゥス』初版挿絵［木版画］1509年

ると癩［ハンセン］病に罹った。木の実を携行し別の川に出て渡ると足の肉が回復した。水を容器に入れて進み、別の木の実を食べると癩病が治った。その木の実を携行し進むと城があった。何者かと尋ねられ医者と名乗った。王様が癩病と聞いた彼は城へ行き、二番目の木の実で病気を治し、二番目の水で王様の肉を回復させ、贈り物を受け取った。その後、ヨナタンは船で帰国した。有名な医者が来たという噂が広がり、癩病に罹っていた例の女が医者を呼んだ。彼を識別できない女に、ヨナタンは、罪を告白して騙し取った物を返すように言った。女はすべてを告白し、三つの宝物の在り処を教えた。ヨナタンはそれらを発見し、女に癩病になった木の実を食べさせ、足の肉が剥がれる川の水を飲ませた。彼女は苦しみ叫びながら息絶えた。ヨナタンは母親の許に帰って、一部始終を報告し、やがて安らかに生涯を終えた[40]。

魔法の贈り物、誘惑的な女の策略による（贈り物の）喪失、最後にその奪還、というストーリーは、一五〇九年、南ドイツのアウクスブルクで刊行された民衆本『フォルトゥナートゥス』Fortunatus の内容と驚くほど似ている[41]（図版2）。二部構成の後者は、発表以来、ドイツ国内ばかりではなく、ヨーロッパの特に西部と北部で瞬く間に広く伝承され、今日までに二二一版を重ねたベストセラーである[42]。要約すると、次のような物語である。

［第一部］貧しい両親の息子フォルトゥナートゥスは、故郷キプロス島を離れ、ある貴族に仕え、ロンドンへ向か

う。その途上、彼は殺人事件に巻き込まれて、困難な状況に陥るが、荒野でフォルトゥナ［幸運の女神］に出会う。彼女の贈り物の中で、彼は富を選び、お金が常に中にある袋を受け取る。彼は故郷に帰り、妻と二人の子供、アムペドとアンドロシアと暮らす。彼はさらにインドとエジプトへ旅し、アレクサンドリアの君主［スルタン］から、何処へでも彼を運んでくれる魔法の帽子を騙し取る。魔法の品を注意深く用いることによって、フォルトゥナートゥスは富と権力を手に入れる。

［第二部］フォルトゥナートゥス死後、二人の息子の中、冒険好きのアンドロシアは、誘惑的で薄情なイギリス王女アグリッピナの策略によって袋を失うが、兄から騙し取った魔法の帽子の助けでそれを取り戻し、王女に復讐する。しかし逆に、帽子を奪われ、荒野を彷徨う。林檎の木から実を二つ食べると、彼の頭に角が生える。隠者の示唆で、別種の林檎を食べると角は消える。そこで彼はアグリッピナに最初の林檎で角を出させ、医者に変装して、第二の林檎で角を取り去る。その後、キプロス島の王の許へ彼女と結婚するために戻るが、嫉妬した伯爵たちに捕えられ、袋を奪われ殺害される。兄アムペドも悲嘆のあまり死ぬ。魔法の品の威力は、所有者の死とともに消える。そして伯爵たちは処刑される。フォルトゥナートゥスが、幸運の女神に、富の代わりに知恵を願っていたら、ソロモンのように、この世で最も豊かな王になっていただろうに、と物語は締め括られる。[43]

十六世紀初頭に刊行された『フォルトゥナートゥス』は、一五五三年にはH・ザックス、一五九九年にイギリスでT・デッカーがこれを題材に自作を発表した他、ドイツ・ロマン主義の時代、作家L・ティーク、L・ウーラント、A・v・シャミッソーによって翻案版「フォルトゥナートゥス」が発表された。[44] 人気の秘密は、恐らく、波乱万丈のストーリー展開と、人知を超えた「魔法」Zauberのモティーフにある。いずれにせよ、『ゲスタ・ロマノールム』第一二〇話と『フォルトゥナートゥス』の類似性は注目される。両者を対比すると、類似は一層明白になる。

『ゲスタ・ロマノールム』	『フォルトゥナートゥス』
1魔法の贈り物	［幸運の女神］
［父の遺産］	袋・帽子
指環・首飾り・織物	

2 喪失の原因	美人の欺瞞	王女の策略
3 魔法の果物	木の実［癩病の薬］	林檎［角の消去］
4 喪失の回復	指環・首飾り・織物	帽子（禍の源として焼却）

昔話における〈魔法の贈り物〉に強い関心を抱いたA・アールネは、『フォルトゥナートゥス』を例に、昔話の基本要素を析出したが（『昔話の比較研究』[45]）、中世文学のトポスとしての［擬人化された］幸運［フォルトゥナ］や右の魔法の贈り物（AT七五〇）以外に、プロップの『昔話の形態学』[46]を応用すると、贈与／喪失／回復という図式が『ゲスタ・ロマノールム』第一二〇話と『フォルトゥナートゥス』に共通していることが分かる。グリム兄弟編『子供と家庭の童話集』所収の「キャベツ驢馬」（KHM一二二）は、まさしくその類話に他ならない。粗筋は次の通りである。

昔、若い快活な狩人がいた。森で醜いお婆さんに出会い、施し物を請われ、分相応のものを上げると、お婆さんはお礼に語る。マントを奪い合う鳥を撃つと、人を何処へでも運んでくれる「魔法のマント」Wunschmantelが手に入る。また死んだ「鳥の心臓」Vogelherzを鵜呑みにすれば、毎朝金貨が枕の下にある。狩人は「賢い女」weise Frauに礼を言って、彼女の指図通り、マントと金貨を獲得し、両親に別れを告げ、世界見物の旅に出る。

ある日、森の中の城で、彼は老女と美しい乙女を発見する。老女は魔女Hexeで、狩人が宝物［鳥の心臓］を持っていることを見抜き、娘を狩人と仲良くさせ、煎薬で狩人の口から鳥の心臓を吐き出させ、娘がそれを呑みこむ。老婆は魔法のマントも欲しくなり、娘を遣って宝石の山へ狩人を誘い、彼を眠らせてマントを奪い、山に置き去りにする。山に棲む巨人たちの話を聞き、狩人は雲に乗って野菜畑に舞い降りる。キャベツを食べると驢馬に変身する。が、別のキャベツを食べると人間の姿に戻る。幸運のキャベツと不運のキャベツを持って、狩人は変装して例の美人のいる城へ出かける。王様の使いと称して、狩人が貴重な（実は不運の）キャベツを老婆に渡す。彼女はそれを食べ牝驢馬に変身する。女中も美人の娘もキャベツを食べ

牝驢馬になる。三匹を粉ひきに預け、老婆驢馬が死ぬと、狩人は残りの二匹を連れ戻し、幸運のキャベツを食べさせる。人間の姿になった娘は狩人に謝罪し、マントと鳥の心臓[47]の在り処を教える。狩人は娘と結婚して楽しく暮らす。

KHM「原註」によると、「キャベツ驢馬」は「ドイツ系ボヘミア人から［聴取］」された昔話である[48]。一八一四年十二月十日、ヤーコプ・グリムは当時滞在中のウィーンからこう報告している。「私はキャベツ驢馬の素晴らしい昔話を入手した。我々［ドイツ人］にはまったく欠如している話だ[49]」。グリム自身にとっても、珍しい興味深い昔話だったようである。

「原註」の冒頭、グリムはコメントする。「人間が驢馬に変身するのは注目されるが、それはすでにアプレイウス以来知られている[50]」。そして「原註」末尾にこう記す。「ここにはフォルトゥナートゥス伝説が非常に明瞭に存在する。但し、これがドイツ版であることも証明可能である。何故なら、この物語は民衆本には拠っていないことが明らかだからだ。この物語は遥かに古風で素朴である。［KHM］三六と五四を参照。［前者では］魔法のマントと角［つの］ではなく、帽子と袋が出てくる。『ゲスタ・ロマノールム』（ラテン語版一二〇話、ドイツ語版八話）ではすべてがもっと素朴である。フォルトゥナートゥスでは鼻の代わりに角が生え、前者［GR］では癩［ハンセン］病が発生する[51]」。

驢馬の姿になった男［ルキリウス］が動物の視点から世の中を見るアプレイウス（紀元後一二五年頃）の『変身物語』Metamorphoses（別名『黄金の驢馬』）に、グリムは「キャベツ驢馬」の原型を探る。右の註に挙げられたKHM三六「テーブルよ食卓の準備」「金貨を出す驢馬」「こん棒よ袋から出ろ[52]」Tischchen deck dich, Goldesel und Knüppel aus dem Sackと同五四「背のうと帽子と角笛」Der Ranzen, das Hütlein und das Hornlein[53]の二篇をグリムが〈古風〉altertümlich で〈素朴〉einfach と感じているのは、ジャンル論的な考察にとって重要である。民衆本の散文小説は近代の産物であり、昔話はそれ以前の時代、特に中世（あるいは古代）との繋がりを維持した文学であることを、グリムは右の「原註」で確認したのである。「キャベツ驢馬」は民衆本『フォルトゥナートゥス』より遥かに古代的なの

だ。因みに、アールネ／トンプソンの話型によれば、「キャベツ驢馬」のメルヘンはＡＴ五六七「魔法の鳥の心臓」The Magic Bird-heartとＡＴ五六六「三つの魔法の品物と不思議な果物」（「フォルトゥナートゥス」）The Three Magic Objects and the Wonderful Fruits (Fortunatus) に分類される。[54]

「キャベツ驢馬」の中の「魔法の鳥の心臓」は、『ゲスタ・ロマノールム』（ＧＲ）の「指環・首飾り・織物」、『フォルトゥナートゥス』（Ｆ）の「袋・帽子」に対応し、「不思議な果物」（＝キャベツ）は、ＧＲ「木の実」、Ｆ「林檎」にそれぞれ対応する。また「贈与／喪失／回復」の図式は、ＧＲ「父の遺産」とＦ「幸運の女神の贈り物」／ＧＲ「美人の欺瞞」とＦ「王女の策略」による喪失／ＧＲ・Ｆ奪回である。なお、「キャベツ驢馬」においては、「お婆さん＝賢い女」／「老女＝魔女」が対比されているが、「賢い女」weise Frau はヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』によると、ゲルマン古代の「巫女」的存在で、ＫＨＭの中では、悪役である「魔女」Hexe とは対照的な、神秘的で善なる存在である。[55]

ところで、中世説話集『ゲスタ・ロマノールム』「ヨナタン」において、主人公は、彼を再三欺いた美女に復讐を遂げる。また民衆本『フォルトゥナートゥス』は主人公の殺害と殺害者の処刑で幕を閉じ、人生の幸福とは、富ではなく知恵によって初めて実現する、と教訓を伝える。以上二篇に対して、ＫＨＭ一二二「キャベツ驢馬」は、幸福な結婚で物語を終える。メルヘンらしいハッピーエンドの結末である。

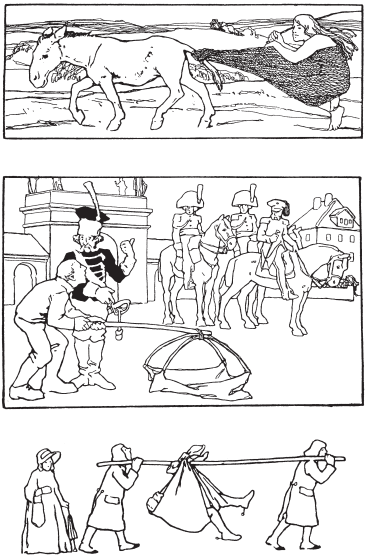
「キャベツ驢馬」は「ドイツ系ボヘミア人から［採取］」とグリムは「原註」に記した。この昔話が、南ドイツに普及した民衆本『フォルトゥナートゥス』より古い性格の異色の作品であることを考えると、あらためて、ヨーロッパにおける口承文芸の広範さと複雑さに気付かされる。ともあれ、『ゲスタ・ロマノールム』の種子は、何らかの経路を辿って、『フォルトゥナートゥス』に、そしてグリム童話「キャベツ驢馬」に着地して、見事な花を咲かせたのである。

第四章　「半分馬に乗って」

『子供と家庭の童話集』ＫＨＭ九四「賢い百姓娘」Die

kluge Bauerntochter（図版3）は、前述ドロテーア・フィーマンからグリム兄弟が聴き取った昔話である。（以下粗筋）

昔、貧しい百姓がいた。財産と言えば、一人娘だけだった。父親は娘の進言で、痩せた土地を王様から分けてもらい、畑を耕した。すると泥の中に臼が見つかった。王様に献上しようとしたが、娘は杵がないと駄目だと言った。しかし父親は頑固で、王様に臼を持参した。王様は杵がないのを見て、父親を牢屋に入れた。



図版3　O・ウッベローデ『グリム童話集』94「賢い百姓娘」挿絵

娘の言う通りにするべきだったと父親が嘆いている、と家来から聞いて、王様は知恵のある娘を呼び寄せた。そして次のような謎をかけ、解けたら嫁にすると言った。〈服を着ず、裸にならず、馬に乗らず、車に乗らず、道を通らず、道の外に出ずに自分の所へ来ること〉。娘は裸になり、漁の網を体に巻き付け、驢馬の尻尾に網を結びつけて引かせ、彼女の足の親指で地面を踏み、すべての条件を満たして、王様の所へ行った。王様は父親を牢屋から出し、娘を嫁にして財産を彼女に預けた。ある時、兵隊の訓練を視察に行った王様は、城の前で、一頭の仔馬が二頭の牡牛の間にいるのを見た。牡牛の飼い主の百姓が、仔馬は自分のものだと主張して、馬の飼い主と喧嘩した。王様は不条理にも、仔馬は牡牛の飼い主のものだと裁定した。馬の飼い主は百姓出身の妃に相談し、道の真ん中で漁をする振りをするように指示された。王様がそれを見て訳を訊くと、百姓は、妃の言葉通りに、〈牡牛に馬の子が産めるなら、水のない町の広場で魚も獲れるはず〉と回答した。誰の入れ知恵か尋問され、百姓は妃だと白状した。王様は妃に離縁を申し渡したが、一つだけ一番大

切なものを持参してよいと言った。妃は別れの盃に催眠剤を入れて王様を眠らせ、馬車で彼を自分の小さな家に運び込んだ。目を覚ました王様に、妃は王様以上に大切なものはないので我が家に持参しました、と言った。王様は涙を流し、妃を城に連れ帰り、あらためて結婚式を挙げた。[56]

身分の差を超えた愛の勝利を謳う、心温まる右の昔話を、グリム兄弟は初版以降、最終第七版までＫＨＭに収録した。この昔話は、実は、ヨーロッパの伝承文学の中でも有名なものに属している。『ゲスタ・ロマノールム』第一二四話「半分馬に乗って」もその一つで、グリム自身、ＫＨＭ「研究篇」（『ゲスタ・ロマノールム』）の中で、本話は九四「賢い百姓娘」の注釈を参照、とメモしている。[57]

ＧＲ第一二四話の原題（独訳）は「女を信用してはならず、女に秘密を打ち明けてもならない。女は怒ると、何も隠してはおけないから」Wie man den Weibern nicht trauen und keine Geheimnisse anvertrauen darf, da dieselben, wenn sie in Zorn geraten nichts verbergen という長いもので、内容は次の通りである。（以下要約）

名門の騎士がある理由で王の機嫌を損ねたため、家来を仲介役に差し向けて何とか体裁を保ったが、条件をつけられた。すなわち、〈第一に、宮廷へ半分歩き半分馬に乗って出頭すること、第二に、最良の友と最上の道化師と最大の敵を連れて来ること〉。騎士は困ったが、ある晩、旅人を自宅に泊め、妻にこう耳打ちした。旅人は現金を持っているから、彼を殺してそれを奪うつもりだ、と。騎士はしかし、夜明け頃、旅人を起こして出立させた後、子牛を殺して切り刻み、頭と手足を袋に詰め、胴体は牛小屋に埋めておいた。朝、彼は妻に袋を渡して、旅人を殺したかのように装った。王の面前に出頭する時が来て、騎士は右に犬を連れ、懐に幼い息子、左に妻を従えて、王の城へ向かった。彼は右足を犬の背中に乗せて乗馬の姿になり、もう片方の足で歩いた。王はそれを見て言った、最良の友はどこか、と。騎士は剣で犬に切りつけた。犬は逃げたが、騎士に呼ばれると、忠実な友として、彼の所へ戻った。道化師はどこか、と問われると、騎士は戯れる幼子を王に見せた。最大の敵は、と聞かれると、妻に

平手打ちを食らわせて罵った。妻は怒って、夫が旅人を殺したと言った。一同は騎士の家に行き、土を掘り返した。すると牛の肉塊が出て来た。皆は騎士の頭の良さを褒め、彼は以後、王の寵臣となった。[58]

グリム童話九四の賢い百姓娘、『ゲスタ・ロマノールム』第一二四話の騎士、いずれの主人公も、主君に命じられた通り、半分馬（あるいは犬）に乗り、他の条件も満たして、見事、難題を解決し、以後、幸せに暮らす。右の話は、J・パウリの『冗談とまじめ』（一五二二年）にも採録されている。パウリは、自作の執筆に際して、『ゲスタ・ロマノールム』を参照していた。[59]時間的に二〇〇年余りの時間差がある両作品は、いわゆる「模範集」の代表作であるが、ここで知恵あるいは機知の大切さを説いているのが印象的である。当時、教会で説教を聴いた人々は、この種の物語から、身分制等、厳しい世の中を生き抜くためには、頭脳を働かせることがいかに重要かを、ストーリーに耳を傾け、それを楽しみながら、学び取ったに相違ない。難題を解決しなかったとしたら、騎士（GR）にも職人（『冗談とまじめ』）にも、確実に、破滅が待っていたのである。

ところで、KHM九四「原註」の中で、グリム兄弟はこれらの「模範集」よりもさらに古い文献を紹介している。北欧のサガ文学に登場する「アスラウク」Aslaug 伝説である。「ここには、ブリュンヒルドとシグルズの娘アスラウクについての古い伝説の痕跡が明らかに維持されている」[60]、と兄弟はメモする。

アスラウクは、九世紀のデンマークに歴史を遡る『毛皮ズボンのラグナールのサガ』Ragnars saga loðbrókar（Saga von Ragnar Pelzhose）（十三世紀後半に成立）に登場する人物である。伝承によれば、ヴェルスンガ族の英雄シグルズとヴァルキューレのブリュンヒルドとの間に生まれた彼女は、後に、スカンディナヴィア半島の主要な種族の女祖先となったと言われる。[61]KHM九四「原註」は伝説を詳しく紹介する。

「〈王族の生まれ〉königlich geborne であるにも拘わらず、不運にも農夫の手に引き渡された彼女は、名は明かさないものの、王家の出であることが明確に示される。彼女はその境遇と［育ての］両親を超えて賢明である。王様は、ラグナールのように、クラカ（アスラウクは農婦としてそう呼ばれていた）の〈賢さ〉Klugheit に惹かれる。彼女を

試すために、王様は彼女に同じように一つの〈謎〉Rätselをかける。彼女はその明敏さによって謎を上手く即座に解く。謎の内容は［KHM九四と］殆ど一致しており、同じ考えを多様に表現したものに過ぎない。北欧の王様はクラカ（『毛皮ズボンのラグナール』第四章）に、〈服を着て、服を着ず、食べ、食べず、一人ではなく、誰も連れずに〉来るように要求する。彼女は、ここ［KHM九四］と同様、裸で漁網に〈包まる〉が、網から彼女の美しい髪が見える。彼女は葱（玉葱）を少し齧ったので、その匂いが感じられ、彼女の犬が一緒に走って行く。他の物語の類似の謎＊も参照されるべきだが、そもそも古い民間の謎々にそれは見受けられるである[62]」。

以上の「原註」の脚注には次のように記されている。「＊パウリの『冗談とまじめ』に以下のような笑話［四二三番］が収録されている［以下略］。…『ゲスタ・ロマノールム』（ラテン語版一二四番）はそれとは異なっている。［以下略[63]］」。

古代北欧のシグルズとブリュンヒルド伝説は、周知のように、ドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』に素材を提供しているが、それとは別系統のサガ文学に、彼らの娘アスラウクに纏わる伝承があった事実は興味深い。しかもその伝承は、叙事詩とは対照的に、現実的・通俗的な笑話の源となっていたのである。グリムはKHM九四「賢い百姓娘」の系譜を『ゲスタ・ロマノールム』と『冗談とまじめ』、そして北欧のサガ文学に探りながら、最後に、口承文芸の一種、「謎々」Rätselにこの笑話タイプの原型を認める。

伝承文学研究の醍醐味は、ある物語を、一見眼に見えない無数の伝承の網の目の中に、歴史的（＝垂直）かつ空間的（＝水平）に位置づけて、普遍的なテーマを掘り下げてゆくところにある。グリム童話の「原註」はその模範的な手法を示している。KHM九四に限っても、これだけの背景があったのである。謎々が昔話や伝説といったジャンルと内密な関係を持っていたことは、あらためて注目されるが、発生史的な観点は、時に、ジャンルの深層構造の解明に寄与するのかも知れない。

結語

中世後期の『ゲスタ・ロマノールム』（GR）は、「補

遺」を除いても、一八〇篇を超す浩瀚な説話集である。グリム兄弟は『子供と家庭の童話集』（ＫＨＭ）を編纂するに際して、その中から十四篇を選抜してＫＨＭ「研究篇」で紹介・分析した。本稿では、第二〇話「受け取れ、返せ、逃げよ」、第一二〇話「ヨナタン」および第一二四話「半分馬に乗って」について、特にＫＨＭとの関連性に着目しながら、詳しく見てきた。

運命の不思議をテーマとしたＧＲ第二〇話「受け取れ、返せ、逃げよ」は、ＫＨＭ二九「黄金の毛が三本ある悪魔」の原型とも言える物語で、同類の話はグリム編『ドイツ伝説集』（四八六）の神聖ローマ皇帝ハインリヒ三世に関する伝承にも見られ、また古代中国の『搜神記』にも、不可避な運命の奇談が載っていた。まさに人類普遍のこの関心事は、Ｒ・Ｗ・ブレードニヒの名著のように（『運命の女神』[64]）、民間信仰の視点から、また場合によっては、深層心理の問題として考察され得る課題である。

悪女の魅力に翻弄されるＧＲ第一二〇話「ヨナタン」は、魔法の品が介在することで、長編小説にも昔話にも展開可能な物語である。一五〇九年に刊行されて以来、広く人気を博し、特にドイツ・ロマン主義の時代、詩人たちが挙って翻案を試みた民衆本『フォルトゥナートゥス』の恐らく元になったその物語は、ＫＨＭ一二二「キャベツ驢馬」にメルヘンとして結実した。ＧＲでは、主人公を騙した女は、悲惨な最期を遂げるが、グリム童話では、その罰は魔女の老婆に科され、邪気のない娘は主人公と結婚して物語は終わる。昔話というジャンルの本質と機能を考える上に、以上三作品の比較は示唆的である。

ＧＲ第一二四話「半分馬に乗って」は、ＫＨＭ九四「賢い百姓娘」の類話で、笑話的な要素がなくはないが、アールネ／トンプソンの話型では「短編物語」ＡＴ八七五に分類されている。「本格昔話」の一種で、「謎」とそれを説く「知恵」が物語の核になっている。題名からは、ＫＨＭ三四の「賢いエルゼ」Die kluge Else が連想されるが、同じ〈賢い〉klug でも、愚か村タイプに属する後者の〈賢い〉は（ア）イロニーのそれであり、ＫＨＭ九四の〈賢い〉とは対照的である。その「謎」と「知恵」が、北欧のサガ文学（アスラウク伝説）に起源があることをグリムは指摘した（「原註」）。昔話における「謎」も検討されるべきテーマである（Ｍ・リューティ『民間伝承と創作文学』[65]）。

中世ヨーロッパの文学は、十三世紀後半から、「有用性」

図版 4　『ゲスタ・ロマノールム』出版当時の挿絵一般「キリスト降誕」

utilitas への傾向が強まったと言われる。[66]「模範集」の伝統は、キリスト教聖職者の説教活動にとっても重要な役割を演じたが、『ゲスタ・ロマノールム』の各篇に付された「教訓的解説」Moralisation はその端的な証明である。但し、GRの中心テーマは、人間と人間の関係（愛、嫉妬、等々）、つまり、世俗的な現実の諸相に向かっており、模範集の悼尾を飾る『冗談とまじめ』も、著者がフランチェスコ会の説教師ではあるものの、内容的には、「笑話」Schwank 的な「楽しみ」の性格を色濃くしている（同書「序文」[67]）。「楽しみ」の中で「教訓」を与えるこの姿勢は、グリムのメルヘン観に継承されてゆくであろう（KHM「序文」[68]）。「有用性」は、「楽しみ」と「教訓」の両性格が揃って初めて、実効可能となるのである。

最後に、日本における『ゲスタ・ロマノールム』受容に関しては、伊藤正義訳GRの「解説」に詳しいが、一言付しておきたい。成城大学民俗学研究所の柳田文庫には、『ジェスタ・ローマノーラム』（西洋中世今昔物語）、金子健二訳（寶文館蔵、昭和三年一月十五日発行）が所蔵されている（図版4）。昭和三年、すなわち一九二八年は、柳田國男が国際連盟委任統治委員としてジュネーヴに滞在・帰国して五年目で、当時、彼はヨーロッパで収集した洋書を次々に読破していた。[69]『ゲスタ・ロマノールム』に関しては、彼は恐らく愛読書、ボルテ／ポリフカ編『グリムの「子供と家庭の童話集」注解』第四巻の『ゲスタ・ロマノールム』解説[70]とレクラム版KHM第三巻「研究篇[71]」から詳細を知っていたに違いないが、同時に、右の邦訳にも親しんでいたと思われる。金子訳GR（恐らく英訳からの重

訳）は全一八一篇と補遺四篇を収め、「はしがき」の中で、訳者は「西洋に於ける教訓的物語文学の最古の物の一」としてのGRの「文学的価値」と「甚大な影響力」に触れ、GRを「西洋の今昔物語」と位置づけ、「東西両洋の今昔物語」が「極めて類似」していることを指摘している。[72] 柳田自身は、結局、GRに言及することはなかったが、西洋の説話文学（『ゲスタ・ロマノールム』）と東洋のそれ（『今昔物語集』等）の東西比較は、大きな課題として今後に俟たれるであろう。本稿では、『ゲスタ・ロマノールム』とグリム兄弟の『子供と家庭の童話集』（「研究篇」「原註」を含む）を両極に、昔話研究の視点から、前者GRに内在するメルヘンの萌芽を幾つか考察した。

注　事典・辞典類、昔話研究とグリム関係の文献は、略号を含めて、（1）「カロリング朝」末尾、『ゲスタ・ロマノールム』関連は、本稿の「主要参考文献」を参照されたい。

註

（1）　Enzyklopädie des Mittelalters, Bd.2.3. Literatur.
（2）　a.a.O., S.21–22.
（3）　Gero von Wilpert, Sachwörterbuch der Literatur, Alfred Krōner Verlag, Stuttgart, 7. Aufl., 1989, S.272–273. (Exempel).
（4）　a.a.O., S.272.
（5）　a.a.O., S.272–273.
（6）　Enzyklopädie des Märchens, Bd.5 (1987), S.1201–1212. (Gesta Romanorum)
（7）　Enzyklopädie des Märchens, Bd.10, S.661–670. (J.Pauli)
（8）　KHM (Reclam). Bd.1–3.
（9）　Jacobus de Voragine, Legenda aurea, Lateinisch/Deutsch. (Nachwort)
（10）　Gesta Romanorum. Lateinisch/Deutsch.（Nachwort）および註（6）
（11）　Gesta Romanorum (Reclam) a.a.O., S.259.
（12）　註（6）S.1202.
（13）　註（6）, S.1201—1202.
（14）　註（6）S.1204—1205.
（15）　註（10）S.258–259.
（16）　註（10）S.265.
（17）　KHM (Reclam), Bd.3.
（18）　Die Bibliothek der Brtider Grimm, S.113.
（19）　KHM (Reclam), Bd.3./KHM (BDK).

(20) 註（18）
(21) Gesta Romanorum. Märchen, Sagen und Legenden des Mittelalters. 邦訳は「主要参考文献」、レクラム版は註（10）参照。
(22) KHM (Reclam), Bd.3, S.294.
(23) a.a.O., S.294–299.
(24) 邦訳『ゲスタ・ロマノールム』九六—九八頁、GR (Graesse), S.44–47.
(25) KHM (BDK), S.235–244.
(26) 旧約聖書「サムエル記」下、十一章（『聖書』新共同訳、日本聖書協会、一九九四年、四九五—四九六頁
(27) DS 480 (BDK), S.537–539. /KHM (BDK), S.142–149.
(28) KHM (BDK), S.142–149.
(29) KHM (BDK) S.1210.
(30) KHM (Reclam), Bd.3., S.57.
(31) 旧約聖書「出エジプト記」二章（前掲書、九五頁）
(32) アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、二〇〇九（一九五三）年、第二巻Ⅳ（八〇頁）
(33) M・リューティ『民間伝承と創作文学』高木昌史訳、法政大学出版局、二〇〇一年、「伝承文学と創作文学における人間の自己遭遇のテーマについて」一七九頁
(34) DS (BDK), S.539.
(35) Gesta Romanorum (Graesse) S.47.
(36) 干宝『搜神記』竹田晃訳、平凡社ライブラリー、二〇〇〇年、四四八「運命の神」、五八二—五八四頁
(37) KHM (Uther) Bd.4, S.64.
(38) A. Aarne/S.Thompson, The Types of the Folktale AT930, p.325–326.
(39) AT461, p.156–157.
(40) 邦訳『ゲスタ・ロマノールム』四七八—四八二頁、GR (Graesse), S.246–248.
(41) Enzyklopädie des Märchens, Bd.5, S.9.
(42) a.a.O., S.7.
(43) a.a.O., S.7f. Deutsche Volksbücher in drei Bänden, Bd.1 (Fortunatus). 邦訳『幸運のさいふと空とぶ帽子』藤代幸一・岡本麻美子訳（ドイツ民衆本の世界）四、国書刊行会、一九八八年所収）
(44) E. Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 7.Aufl., 1988, S.218–220.
(45) A・アールネ『昔話の比較研究』関敬吾訳、岩崎美術社、一九八三（六九）年、九二頁
(46) プロップ『昔話の形態学』北岡誠司・福田美智代訳、白馬書房、一九八七年、三五三—三五四頁（F贈与・獲得・略奪）
(47) KHM (BDK), S.509–516.
(48) KHM (Reclam), Bd.3, S.492.

(49) a.a.O., S.492.
(50) a.a.O., S.201.
(51) a.a.O., S.204.
(52) KHM (BDK), S.168–178.
(53) a.a.O., S.244–250.
(54) AT567, p.208/AT566, p.207–208.
(55) J.Grimm, Deutsche Mythologie, Bd.1, XVI. S.328–362. (weise frauen)
(56) KHM (BDK), S.415–419.
(57) KHM (Reclam), Bd.3, S.298.
(58) 邦訳『ゲスタ・ロマノールム』、四九七―四九八頁、GR (Graesse), S.246–248.
(59) Enzyklopädie des Märchens, Bd.10, S.664.
(60) KHM (Reclam) Bd.3, S.170.
(61) Enzyklopädie des Märchens, Bd.1, S.878–879. (Aslaug)
(62) KHM (Reclam), Bd.3, S.170–171.
(63) a.a.O., S.171.
(64) ロルフ・W・ブレードニヒ『運命の女神』、竹原威滋訳、白水社、二〇〇五年
(65) M・リューティ『民間伝承と創作文学』、「民間伝承における人間像」三〇三―三〇九頁
(66) Enzyklopädie des Mittelalters, Bd.2, S.22.
(67) Deutsche Schwänke in einem Band. Johannes Pauli, Schimpf und Ernst, S.39, 41. 邦訳、ヨハネス・パウリ『冗談とまじめ』、名古屋初期新高ドイツ語研究会訳、同学社、一九九九年、一一三頁
(68) KHM (BDK), S.12–21.
(69) 『柳田國男とヨーロッパ』高木昌史編、三交社、二〇〇六年
(70) J.Bolte/G.Polívka, Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm, Bd.4, S.133–144.
(71) KHM (Reclam), Bd.3, S.294–299.
(72) 『ジェスタ・ローマノーラム』(西洋今昔物語)、金子健二訳、寶文館、昭和三年、一―八頁

主要参考文献

＊Gesta Romanorum. Märchen, Sagen und Legenden des Mittelalters. Aus dem Lateinischen von Johann Georg Theodor Graesse, Anaconda Verlag, Kōln, 2009.

＊Gesta Romanorum. Lateinisch/Deutsch. Ausgewählt, übersetzt und herausgegeben von Rainer Nickel, Philipp Reclam jun., Stuttgart, 2009.

＊Jacobus de Voragine, Legenda aurea. Lateisch/Deutsch. Ausgewählt, übersetzt und herausgegeben von Rainer Nickel, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2011.

＊Märchen des Mittelalters. Herausgegeben und übersetzt von

Erich Ackermann, Anaconda Verlag, Köln, 2007.
＊Deutsche Volksbücher in drei Bänden, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar, 1982.
＊Deutsche Schwänke in einem Band, Ausgewählt, übertragen und eingeleitet von Günter Albrecht, Aufbau-Verlag, Berlin und Weimar,1983.
＊『ゲスタ・ロマノールム』伊藤正義訳、篠崎書林、平成六（昭和六二）年
＊『ジェスタ・ローマノーラム』（西洋今昔物語）金子健二訳、寶文館、昭和三年
＊ヤコブス・デ・ウォラギネ『黄金伝説』（全四巻）前田敬作他訳、人文書院、一九八四―一九八七年
＊ヤコブス・ア・ウォラギネ『黄金伝説抄』藤代幸一訳、新泉社、一九九四年
＊『冗談とまじめ』ヨハネス・パウリ、名古屋初期新高ドイツ語研究会訳、一九九九年
＊『ヘッセの中世説話集』林部圭一訳、白水社、一九九四年
＊『幸福のさいふと空とぶ帽子』藤代幸一・岡本麻美子訳（「ドイツ民衆本の世界」四、国書刊行会、一九八八年所収）

図版一覧

図版1　説話集『ゲスタ・ロマノールム』成立時のヨーロッパ地図（「最新図説」『世界史』浜島書店、一九九四年）
図版2　民衆本『フォルトゥナートゥス』初版挿絵［木版画］一五〇九年（Gestalten des Mittelalters, Alfred Kröner Verlag, 2007）
図版3　O・ウッベローデ『グリム童話集』九四「賢い百姓娘」挿絵（O.Ubbelohde, Zeichnung zu KHM 94/Insel Verlag, 1984）
図版4　『ゲスタ・ロマノールム』出版当時の挿絵一般「キリスト降誕」（『ジェスタ・ローマノーラム』金子健二訳、口絵）